

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 大日南苗香姉

開 会 招 詞 詩篇100：1－5

* 賛 美 歌 12：1

1. 聖なる、聖なる、聖なるかな、三つにいまして 一つなる

神の御名をば あさまだき おきいでてこそ ほめまつれ。 アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。 主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 85：1

1. 地にあるものみな、世に住む者みな、すべて主のものなり。

主はその基を、大水の上に据えたまいしゆえに。

共同の祈禱 7 カルケドン信条 (キリストの二性一人格)

三位一体の第二位格である神の御子は、まことの永遠の神であり、み父と同質・同等でありながら、時満ちて、人間の性質を、それに属するすべての固有の性質や共通の弱さと共にとられ、しか

も罪はなかった。彼は、聖霊の力により、処女マリアの胎に彼女の本質をとって身ごもられた。

そこで、二つの十全で区別された性質、すなわち、神性と人性とが、変換・合成・混合することなく、一つの人格の中に、分離できないように結合されている。この人格は、まことの神またまことの人であり、しかも一人のキリスト、神と人との間の唯一の仲保者である。

(ウエストミンスター信仰告白8章2節によるカルケドン信条：451年)

献 金 (黒) 教会活動・(赤) 全国高校生 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 箴言8：11-21(旧約 p.1000)

コロサイの信徒への手紙1章15-23節(新約 p.368)

説教・祈祷 「キリストに支えられ」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 39：1, 2

1. わが身の望みは ただ主にかかれり、主イエスの外には 依るべき方なし。

(おりかえし) わが君イエスこそ 救いの岩なれ、救いの岩なれ。

2. 風いと激しく 波立つ闇夜も、みもとに礎を おろして安らわん。(おりかえし)

アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあげさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 63

父、み子、みたまのおおみかみに、ときわにたえせずみさかえあれ。アーメン

* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 古澤兵庫長老(司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階：藤井牧子・那珂信之執事 2階：星野房子執事 / ZOOMホスト・録音：大日南信也

次週 受付 1階：若月学・森永美保執事 2階：加藤良明執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ1：15-23「キリストに支えられて」

キリストのしたこと

今日の説教題は「キリストに支えられて」としました。私たちには土台があります。パウロはコリント書の中で「わたしは神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました」（Iコリ3：10）と語っています。もちろんこれはキリストのことです。私たちの土台はキリストです。その上に私たちはしっかりと足を踏みしめて立っているのです。あるいは、そうあり続けてほしいと、パウロはこのコロサイ書においても勧めている、とも言えます。先ほど読みましたところの23節では「しっかりと踏みとどまり」という言葉がありました。土台に踏みとどまるように、というのがこの箇所の結論です。しかし、それは、単なるパウロの願いではありません。神様とイエス様の願いです。そして、それは同時に私たち自身が幸せに生きるためのコツです。この土台に立ち続ける、あるいは立たせていただく、それがよい人生のコツです。何しろイエス様に支えられているのですから。今日はそんな人生のコツを確かめたいのです。

立場が変わる

ところで、先週説教を聞いてくださった方にはすでにお話ししたのですが、今日の一つ前の9-14節というまとまりは二つに分けられます。9-11節がパウロの祈りです。コロサイの人たちがこのように生きてくれたらよい、いわゆるとりなしの祈りでした。神様にとどまって喜びに至るように、というとりなしです。そして、12-14節というのはどちらかと言いますと、今日読みました、15-23節の方にくっつけてしまってもよいところで、神様と一緒に歩むその根拠を語る場所でした。中でも中心にあるのが13節で、そこでは、私たちキリストにあるものの立場が全く以前とは違っている、ということが言われていました。それは「御子の支配下にうつしてくださいました」という言葉に端的に現れています。わたしたちが大切だと思うこと、生きる基準がもう変わっている、信仰をもち始めたその時から、もう、基本的な路線が変わってしまっているのだ、とパウロは言うのです。このことは、先ほどお読みしました21節でも取り上げられています。「あなた方は以前は神から離れ」とある通りです。もちろん、これは以前は、こうだった、しかし今は、という話です。ということを確認したうえで、もう少しこの問題について考えたいのです。

「悪い」とは

以前の私たちは、神様を良く知らずにいた、と言われればそうかもしれないと思います。神様と関係なく歩んでいた、というのもまあ、そうかもな、と思います。しかし、このところではさらに、「悪い行いによって心の中で神に敵対し」と続きます。これは厳しい言葉です。これからキリスト教を信じたいと考えておられる方がいたら申し訳ないのですが、このパウロの理屈からしますと、イエス様を信じていない人は、「悪い行いによって心の中で神様に敵対して反発している」ということになりかねません。或いは今信仰を持っておられる方でも、あなたたちは昔はこんな人たちだったんだ、神様の敵だったんだ、ということになります。「それは聞き捨てなりませんねー」と思うような言葉です。でも、この言葉は、おそらくパウロ自身の自己反省が入った言葉です。今日の23節に「私パウロはそれに仕えるものとなりました」という締め言葉があります。ちょっと唐突な感じがあります。でもこれは、「俺は使徒だぞー」と言いたいのではないはずで、むしろ、使徒にさせられたんだ、イエス様と出会って変わったんだ、と言いたいのです。もっとも、パウロは、自分がどうやってイエス様に出会って、どう変えられたのか、きちんと書きません。その点では、ちょっとずるいのです。人のことばかりああでもないこうでもないと言っているように見えます。でも他の手紙では、以前のことが書かれていますから、そこから推測することはできます。

「悪いとは」つづき

そこで、フィリピの信徒への手紙3章の言葉を少し読んでみます。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない

者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。」(3:5-7)。パウロは以前、自分の生まれと行いを誇りにしていたのです。間違いなくイスラエル人であること、そして、なによりも、「律法の義については非の打ちどころのない」と言い切るのです。「私失敗しませんから」というのです。「なに言ってんのこの人」と言いたくなりますが、実際の所律法というのはよくできたシステムで、たとえ失敗してもリカバリーできるのですね。「神さま、罪を犯しました」といって、贖いのささげものをしますと、また、神様の民に復帰できるのです。「今日の所は一つこれで」というのが赦されますから、原則どこまででも正しい人でいられるわけです。もっとも、パウロはかなり真面目に律法通り生きたようです。しかし、問題はまさにそこにあります。「わたしは自分の力で立派に生きられる」、「私は神様の助けなどいらない」、「神さまに何かしてもらうほど弱くはない」、という考え方から「神さまなんかいらない」というところまでほとんど一直線につながります。

信仰に踏みとどまる

「神さまいらない」ということこそ「神さまに敵対」している状態です。パウロは、イエス様と出会って、初めてこのことが分かったのです。自分で頑張れば頑張るほどに、実は神様から離れてしまっていた、ということに気付いたのです。気づかされたのです。そして、イエス様と一緒に、まさしくイエス様を土台として生きることを始めたのです。このことがあるからこそ、パウロは、コロサイの人たちにも、また私たちにもですが、キリストを土台とするように、あるいは、その土台に踏みとどまるようにと強くここでも勧めているのです。しかも、ただそこに居ろというだけではなく、キリストを土台として生きるとはどのようなことなのか、わたしたちがキリスト者らしく生きる、あるいは変えられていくとはどのようなことなのかを、もともとは賛美であったらうと思われる言葉をもってきて、示しているのです。それが、15-20節の言葉です。それはある意味で、私たちの物の見方、世界観というのでしょうか、それを変えていく、ということになります。とはいえ、抽象的なことを言っても始まりませんので、実際にみ言葉を見ながら、一緒に考えていきます。その場合に、今日、特に気を付けたいのは15節にあります「見えない神の姿」という言葉です。けれども、この事を考える前提として、まずは創造、この世界がつくられるということについて確認します。

今一度世界の始まりを考える

聖書の最初にあります創世記1章1節以下の言葉は有名です。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった」。世界が造られたときに最初は形がなく、混沌として無秩序だったが、神様の言葉によって光が射しこんだり、水が分けられたり、秩序が形作られていく、という様子が描かれています。こうして、あたかも科学の教科書のようにして、世界が整えられていく様子がしばらく続いていきます。そして問題はこのようなところだけを読みますと、最初は世界はこんな風にできたんだ、けれども、人間が墮落してしまい、世界が悪くなって、それを救うために、イエス様が来て下さって、という順番で私たちは普段聖書を理解しているところがあります。

キリストが最初から支配している

けれども、それは間違っただけではありませんがおそらく不十分です。例えばヨハネによる福音書の書き出しはこうです。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」(1-3節)。これは創世記そっくりであることに気付きます。しかもそれを書き直しているのです。何が変わったかと言いますと、創造の最初からイエス様がいて下さったばかりでなく、むしろ、イエス様によって世界は造られた、ということが言われているのです。そして、私たちの世界観が徹底的にひっくり返るべきところがあるとすれば、ここです。そのことを強く主張しているのが、今日の聖書の16節です。「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。」。この世界にあるものは、たとえ本人がそうと気づかなくても、全くイエス様によって、また、

イエス様のために作られているのです。それだけではありません。

キリストによって立つ

続く17節はこうでした。「御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。」。この後半の「すべての者は御子によって支えられています」というのもよい訳ですが、新しい協会共同訳では「万物は御子にあって成り立っています」と訳しています。イエス様はすべての者より先にあった方だけではなく、今も私たちを成り立たせているのです。さらに言えば、この「成り立つ」と訳された言葉は「共に立つ」とも訳せます。イエス様が私たちを支えて下さる、そのあり方は、丁度、親が子どもの手を取って一緒に立っているように、私たちの手を取って、一緒に立っていてくださる、そのようなありかたです。しかもそれは、ただ、わたしたちがそのままイエス様と立っているのではないのです。と言いますのも、続く18節にこのように書いてあります。「御子は初めの者、死者の中から最初に生まれたものです」。もちろん、これはイエス様のご復活のことです。しかし、それは、ただイエス様だけで終わるものではないということです。最初のものであって、後に続く者たちがいるのです。それは私たち一人一人です。イエス様の復活の後に続くものとして、わたしたちがいて、その私たちとイエス様は、今も一緒に立ってくださっているのです。

神の形

ところで、少し前の所で「見えない神の姿」という言葉が気になるとお話ししました、そのことを最後に考えてみます。神様のお姿というのを私たちは、まじまじと見ることはできません。ただ、創世記には神様のお言葉として「我々にかたどり、我々に似せて人を造ろう」（1：26）とありますから、何かしら人間の姿に近い可能性はあります。しかし、多分パウロがここで言っている「神の姿」とは、このような形の上でのことではありません。むしろ、大切なのは最初に「御子は」とあることです。言うまでもなくイエス様のことです。イエス様のあり方そのものが「神さまの姿」なのです。そして、イエス様は、我々の手を取って、我々と一緒に立ってくださっている方です。そうして、私たちはイエス様に支えられて、イエス様とつ所に生きていくのですが、その場合に、私たちもまた、イエス様に似るものとされていくのです。

キリストに支えられて

私たちはイエス様に支えられ、イエス様によって神様と和解したものとされて以来、イエス様の姿に似たものとされ続けているのです。これからもそうなるのです。そして最終的には22節にあるように「ご自身の前に聖なるもの、きずのない者、とがめるところのないもの」とされていくのです。たとえ私たちの日ごろの生活がどれほどでこぼこしたものであったとしても、なお、私たちはイエス様に手を取られており、イエス様に支えられており、そして、きずのない者となっていくことができるのです。

祈り

全能の父なる神様。あなたはキリストにおいて私たちと和解して下さり、平和を打ち立て、私たちを聖なるもの、きずのない者、咎められるところのない者として受け入れてくださっております故に感謝します。どうぞ、今こそ、わたしたちが、このイエス様という固い土台の上に立っていることを喜び、また、ますますそれにふさわしく歩むものとさせてくださいますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。